

即位前の唐太宗・秦王李世民集団の北齊系人士の分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学史学地理学会 公開日: 2009-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀井, 裕之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/1562

即位前の唐太宗・秦王李世民集團の 北齊系人士の分析

堀井裕之

要旨 唐の二代皇帝太宗李世民の治世（626～649）は、「貞観の治」と称され、唐政權が確立した時期として注目される。李世民は武徳9（626）年6月4日、玄武門の変という非常手段を以て即位した。そして彼を推戴した背後勢力＝李世民集團は、太宗政權の中核として注目される。

先行研究では、李世民の背後勢力として、山東（旧北齊領域）に基盤を置き北齊の遺臣の系譜を引く人士＝北齊系人士が着目され、玄武門の変の背景には、閔隴を基盤とする北周・隋政權が、山東を基盤とする北齊系人士を抑圧してきた「閔隴と山東の対立」の構造が考えられてきた。しかしながら、彼らの具体的な人間関係・政治目的は解明されないまま、李世民によって、山東に地盤を築くために、利用されたことのみが強調されてきた。

こうした立場に立って、本稿ではまず人間関係を再現して、北齊系人士の殆どが、集團性を以て李世民集團に参加したこと、この集團性の起源が、隋政權で、北齊系人士の代表格であった薛道衡の党派（＝薛道衡グループ）にあることを明らかにした。その上で、薛道衡グループの政治目的を考察し、不遇な北齊系人士の地位向上を目指したことを解明した。しかし薛道衡の失脚をもって、その目的は頓挫し、北齊系人士は不遇のまま、隋末の動乱を迎えた。かくして、薛道衡の北齊系人士の地位向上を目指す政治路線は、李世民集團の北齊系人士に継承され、彼らは李世民を守り立てることを通じて、それを果たそうとしたのである。

キーワード：李世民集團、玄武門の変、北齊系人士、閔隴と山東の対立、薛道衡

はじめに

唐の二代皇帝・太宗李世民は、「貞観の治」と称される唐代の確立期を生んだことで有名である。その治世は、武徳9（626）年6月4日、玄武門の変において、兄と弟を殺し、父高祖（李淵）に退位を迫ることによってもたらされた。では、このような厳しい権力闘争をへて、次の「貞観の治」を現出せしめた李世民集團とは、どのようなものであったのだろうか。その人的構成から性格はどのように理解できるのだろうか。

李世民の下に結集した勢力の全体像を示し、基礎的研究を行ったのは、布目潮瀧氏であった。

氏は高祖朝の三省六部、李世民の秦王府、李建成的東宮、齊王李元吉の齊王府の人的構成を再現し、個々の人物の系譜を分析した。その上で、太宗政権は基本的に、北朝後期の支配層から変質していないことを論じ、西魏・北周の支配層が則天武後の立后までイニシアティブを握るとされる陳寅恪氏の「閔隴集團説」を補強した⁽⁴⁾。

その陳寅恪氏であるが、氏は李世民集團の構成要素について、隋～唐初の史書に現れる山東豪傑の存在に着目した。陳氏によれば、山東豪傑とは北魏時代に、山東⁽²⁾方面に徙民されて営戸となった高車・丁零に淵源を持つ新興階層であるという。李世民はクーデターを起すにあたり、洛陽を拠点として山東地域に地盤を築くために、彼らの武力を活用した、と氏は論じた⁽³⁾。この陳氏の説が契機となって、李世民集團の形成に山東出身の人士が深く関わっていることが認識されるようになったのである。陳氏は、隋～唐初の政治史を、閔隴地域を基盤とする閔隴集團と山東地域に基盤を持つ山東集團との二つの地域集團の対立抗争史として捉えており⁽⁴⁾、玄武門の変もまた、その一齣として位置づけた。

これとは別に、氣賀澤保規氏は、北周・隋政権が征服した北齊の遺臣を冷遇し、その権力基盤である山東地域を強圧的に統治したことが、隋末の動乱の背景にあることを明らかにし⁽⁵⁾、玄武門の変の背景に「閔隴と山東の対立」があることを示唆した⁽⁶⁾。この説を踏まえれば、隋～唐初において、山東集團の中心には、北齊系人士が関係すると考えられることになる⁽⁷⁾。

さて、近年にいたっても、この李世民集團中の北齊系人士は注目されており、李錦繡氏⁽⁸⁾・山下将司氏⁽⁹⁾の専論が出されている。

そのうち李錦繡氏は、陳氏の閔隴集團及び山東豪傑の定義を踏まえた上で、閔隴集團に属する李世民・楊玄感・李密の三者を比較し、李世民が最終的な勝者となった要因を、閔隴集團を盟主とする山東豪傑集團との同盟が成立したことに求めた。ただ氏は、李世民と山東豪傑集團が結びついた経緯・理由については触れておらず、それが具体的に何であったか、という疑問が残される。

そして、以上の諸研究の上に立って、近年、注目すべき成果を挙げたのが、山下将司氏であった。氏は、陳寅恪氏以来の玄武門の変研究は、この事件を閔隴集團内の権力闘争と位置づけ、政権構造の質的变化について言及してこなかったと指摘し、改めて李世民集團中の山東勢力について分析を加えた。

山下氏は、玄武門の変で李世民に加担した人物を、正史・石刻史料等から19名抽出した。そのうち山東出身者（北齊系人士を含む）が12名にのほることから、この事件における山東勢力の重要性を再確認した。その上で、李世民集團の山東出身者には、太宗朝の名宰相房玄齡をはじめとして、済水流域⁽¹⁰⁾の出身者が多いこと、彼らが一定の集團性を以て、李世民の幕府に加わったことに注目した。そして房玄齡の一族＝清河房氏の系図を、文献史料・石刻史料から再現し、房氏代々の済水流域の地方官の任官状況を示した上で、房氏が済水流域に、大きな

影響力をもっていたことを明らかにした。そして房玄齡が媒介となって、李世民集団に済水流域の人士を結集させたことを推定した。また山東勢力を中心とする李世民集団と太原元従を中心とし、関中十二軍を基盤に置く李淵集団の質的な差異を論じ、玄武門の変を関隴集団内の権力闘争とする理解は、不十分であることを強調されたのである。ただ山下氏は、李世民集団が山東を、李淵集団が関隴（関中十二軍）を基盤としたが、これは即座に「関隴と山東の対立」を指すものではないとして、玄武門の変にその図式を適用とすることを躊躇している。

このように、これまでの先行研究では、布目氏の見解を除いて、李世民の背後勢力における北齊系人士の重要性が再三にわたり強調されてきた。中でも、山下氏は12名の北齊系人士を詳しく分析して、その存在の重要性を指摘した。ただそこでは、宰相となった房玄齡と高士廉を除いては、すべて武人系で、貞観時代に政治の中核にはいなかったことが指摘できる。そしてその武人系の者たちは、陳寅恪・李錦繡両氏が着目した山東豪傑のメンバーがほぼ包括されている⁽¹¹⁾。もし太宗政権の中核を、李世民集団に見出すのであれば、貞観時代の政治の主導権を握っていた文人官僚に焦点をあててはならないだろう。それに加えて、布目氏の考証をふまえるだけでも、房玄齡と高士廉以外にも、北齊系人士を多数挙げることができる。山下氏は李世民集団内の北齊系人士の全体像にまで、考察が及んでいないといっただろう。

では、李世民集団の北齊系人士グループは、どのような紐帯で結ばれていたのか。これに関しての先行研究は、陳氏や山下氏が、李世民集団の北齊系人士を「山東集団」と称したように、地縁的紐帯を重視してきた。地縁が紐帯であったことは否定しないが、さらに具体的に北齊系人士間を結びつけたもの、人間関係にまでふみこんだ考察がなされていないように思われる。さらに関係がわかることで、李世民集団の形成過程の解明になるのではなかろうか。

また先行研究では、李世民が山東に地盤を築くために、北齊系人士を積極的に登用したことが強調される。しかしながら、一方の北齊系人士の側に立って、彼らがどのような動機（政治的目的）で、李世民と結びついたのかということについては、先行研究ではほとんど触れられていない。

本稿では上記の点を明らかにするため、李世民集団における北齊系人士間の人間関係を、具体的に婚姻・交際関係を整理し、そのことを通して、李世民と結びつくにいたる政治的目的は何であったかを考察し、太宗政権を解明する一助としたい。

1. 李世民集団中の北齊系人士グループ

(1) 房玄齡の婚姻関係と李世民集団の形成

本論に入る前に、李世民集団の北齊系文人官僚の全体像を示しておこう。まず布目潮風氏の研究⁽¹²⁾によって、李世民の幕府の概要を述べよう。李世民は高祖朝において、15の官爵に就任したという。その殆どが遥領であって、とくに李世民集団の形成に深く関係したのは、秦王・

天策上将・陝東道大行台尚書令であった。唐代では親王の下には、直属の幕府が置かれ、李世民も秦王として開府している。天策上将は、山東を平定した李世民に与えられた、王公より上位に置かれた名誉的称号で、幕僚を置くことが許されていた。陝東道大行台尚書令は、山東地域の一部である河南一帯を総督するため洛陽に置かれた陝東道大行台尚書省の長官で、李世民が洛陽に地盤を築くのに利用した官職である⁽¹³⁾。以上の三機関は、布目氏が述べている通り、いずれもほぼ李世民の意思通り、スタッフを招致することができ、李世民集団の人士の大部分が、その三機関の属官であった。

それら三機関の人的構成は、布目氏がほぼ再現しているが⁽¹⁴⁾、氏の目が及んでない石刻史料より、若干増補修正することが可能である。そこから、布目氏の研究成果を踏まえ、既存文献史料や石刻史料を以て補完して、秦王府の文官に就任した北斉系人士を整理すると、「表1 李世民集団の北斉系人士」のごとくとなる。以下、本章では、この表で列挙した北斉系人士を対象として、李世民集団の北斉系人士間の婚姻関係・交際関係を再現してみることとする。

表1 李世民集団の北斉系人士

No.	名 前	本貫	祖父		父		官 職	典 拠	
			名	官 職	名	官 職		石 刻	正 史
1	房玄齡	齊州臨淄	熊	北魏・広川太守	彦謙	隋・涇陽令	秦府記室参軍・文学館学士・行台考功郎中	(昭)「房彦謙碑」	北 39 隋 66 旧 66 新 96
2	高士廉	渤海蓆	岳	東魏・尚書令	勳	北斉・楽安王	雍州治中	(昭)「高士廉塋兆記」	北 51 隋 55 旧 65 新 95
3	李玄道	鄭州	瑾	北魏・著作郎	行之	隋・都水使者	秦府主簿・文学館学士	—	北 100 旧 72 新 102 世 72 上
4	盧赤松	幽州范陽	道亮	処士	思道	北斉・文林館学士→隋・武楊太守	行台兵部郎中	—	北 30 隋 57 旧 81 新 106
5	盧君胤		悉之	北魏・邛州刺史	文構	隋・長陵県令	行台膳部郎中・行台屯田郎中	(北図)9「盧文構墓誌」(35)「李月相墓誌」	世 73 上
6	封倫	觀州蓆	隆之	北斉・太子太保	子繡	隋・通州刺史	天策司馬	—	北 24 北斉 21 旧 63 新 100
7	封泰		子繡	隋・通州刺史	德誉	隋・南由令	秦府参軍	(1297)「封泰墓誌」	北斉 21 北 24
8	薛収	蒲州汾陰	孝通	北魏・常山太守	道衡	北斉・文林館学士→隋・司隸大夫	秦府主簿・文学館学士・行台金部郎中・天策記室参軍	(昭)「薛収碑」	北 36 隋 57 旧 73 新 98 世 73 下
9	薛元敬		温	北周・鄆州刺史	邁	隋・刑部侍郎	秦府文学館学士・天策参軍兼直記室	—	
10	薛懷昱		処道	?	德元	?	天策功曹参軍	(2949)「薛嵩簡墓誌」	世 73 下

即位前の唐太宗・秦王李世民集団の北齊系人士の分析

11	温大雅	太原祁	裕	北魏・太中大夫	君悠	北齊・文林館 学士→ 隋・司隸從事	行台工部尚書	(昭)「温彦博碑」 (139)「温彦博墓誌」	旧 61 新 91 世 72 中
12	顔思魯	雍州 万年	協	梁・鎮西 記室參軍	之推	北齊・文林館 学士→ 隋・東宮学士	秦府記室參軍	(北園) 28「顔勳礼碑」	北 83 北齊 45 南 72 旧 73 新 198
13	顔師古		之推	北齊・文 林館学士 →隋・東 宮学士	思魯	顔思魯の項參 照	敦煌府文学→ 中書舍人		
14	顔相時						秦府文学館学士・ 天策參軍		
15	杜正倫	相州 洹水	景	処士	裕	北齊・秦陵令	直秦府文学館	—	北 26 旧 73 新 106 世 72 上
16	唐儉	并州 晋陽	邕	北齊・宰 相	鑿	隋・戎州刺史	天策長史	(昭) (612)「唐儉墓誌」	北 55 旧 58 新 89 世 74 下
17	孔穎達	冀州 衡水	硯	北魏・治 書持御史	安	北齊・青州法 曹參軍	秦府文学館学士	(昭)「孔穎達碑」	旧 73 新 198
18	蓋文達	冀州 信都	延	北齊・安 平王計曹 從事	永	隋・薊県令	秦府文学館学士	(金) 46「蓋文達碑」	旧 189 新 198
19	戴胄	相州 安陽	?	?	景珍	北魏・司州從 事	秦府士曹參軍	—	旧 70 新 99 世 72 中
20	李守素	趙州	緒	北魏・冀 州司馬	少連	邵州司戸參軍	秦府文学館学士・ 天策倉曹參軍	—	旧 72 新 102 世 72 上
21	李桐客	冀州 衡水	?	?	?	?	秦府法曹參軍	—	旧 185 上 新 197
22	張雲	南陽 白水	世	北齊・兗 州刺史	恭	隋・徐州司馬	秦府左右	(345)「張雲墓誌」	—
23	王安	河南 偃師	通	予州大中 正	道	北齊?洛州主 簿	秦國檢校	(136)「王安墓誌」	—
24	張彦	河内 修武	志立	北魏・海 陵令	莊	北齊・魏郡戸 曹	秦府參軍	(1146)「張彦墓誌」	—

[凡例]

- ・典拠(正史)の略記号は、隋=『隋書』、旧=『旧唐書』、新=『新唐書』、数字は巻数。
- ・典拠(石刻)の引用書略記号は、(金)=『金石萃編』(数字は巻数)、(北園)=北京図書館金石組編『北京図書館蔵中國歴代石刻彙編』(数字は冊数)(中州古籍出版社、1989~1991年)、(昭)=張沛編『昭陵碑石』(三秦出版社、1993年)。
- ・唐代墓誌の前には、括弧付きの番号を付した。これは、氣賀澤保規編『新版唐代墓誌所在総合目録』(汲古書院、2004年)で、墓誌に附された番号である。引用墓誌の所在についてはこちらを参照されたい。
- ・ゴチ人名は、本文で指摘した薛道衡グループ出身の人士。

さて、李世民的謀主として有名なのは、房玄齡(表1-1)である。それは、『旧唐書』巻66・本伝に、

隱太子將有變也、太宗令長孫無忌召玄齡及如晦、令衣道士服、潛引入閣計事。

隱太子(李建成)の將に變有らんとするや、太宗、長孫無忌をして〔房〕玄齡及び〔杜〕

如晦を召して、道士の服を衣て、潜かに引きて閣に入り事を計らしむ。

とあることから確認できる。房玄齡は齊州臨淄の人で、北齊系の房彦謙の子である。房玄齡は、太原から関中進撃中であった李世民的陣營を訪れ、以後、その幕府の記室參軍となった。『旧

唐書』卷66・本伝に、

〔房〕玄齡、独先収人物、致之幕府。及有謀臣猛将、皆与之潜相申結、各尽其死力。

〔房〕玄齡、独り先に人物を収め、之を幕府に致す。謀臣猛将有るに及びては、皆之と潜かに相い申結し、各おの其の死力を尽くさしむ。

とあることから、彼が求められたのは李世民集団のための人材収集であった。山下氏の指摘によれば、房玄齡の家は代々済水流域に影響力を持ち、李世民集団に済水流域の人士が加わる媒介となったという。すなわち、房玄齡は李世民集団の形成に関わる、キーマンの一人であった。山下氏の研究では、房玄齡と李世民集団の北斉系人士とどのような人間関係があったか、明らかにされていない。ここでは房氏周辺の婚姻関係に目を向けてみよう。

まず、房玄齡の叔父にあたる房彦詡の墓誌に拠れば⁽¹⁵⁾、彼は范陽盧氏を娶っている。范陽盧氏は、いわゆる山東門閥に数えられる。とくに北朝から唐代まで通じて栄えたのは、北魏の「姓族分定」で漢人門閥の頂点たる四姓に列した盧玄の四人の曾孫、「北祖四房」（大房・第二房・第三房・第四房）の家系である。この系統は、唐代に山東門閥間の通婚を禁じた禁婚家の認定を受けた家系で、盧氏の嫡流であった⁽¹⁶⁾。房彦詡夫人は、曾祖父を盧淵（字・伯源、幼名・陽烏）と言い、大房の始祖にあたる人物で、盧氏の嫡流と見なされる。

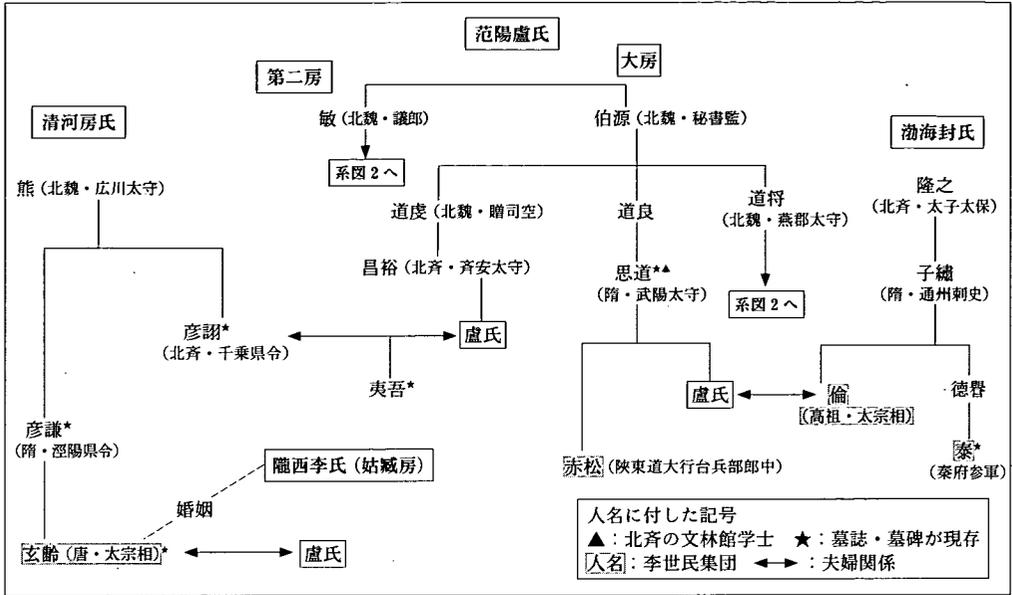
李世民集団にも大房盧氏に属す盧赤松（表1-4）がいる。盧赤松と、はとこ関係にある女性が房彦詡の妻なのである（系図1「清河房氏・渤海封氏・范陽盧氏婚姻関係図」参照⁽¹⁷⁾）。また房玄齡自身も范陽盧氏を娶っており、彼女は系統不明ながら房彦詡との婚姻関係から考えて、盧赤松と近縁の者ではなかったか。とすれば、房氏と盧氏が北朝末～唐初に至るまで、代々婚姻を結ぶ近い関係にあったことが示唆される。

范陽盧氏は北朝～隋唐期において、山東門閥間で閉鎖的な身分的内婚を維持しており、とくに北朝期において、隴西李氏と代々通婚していたことが知られている⁽¹⁸⁾。李世民集団には、隴西李氏（姑臧房）の流れをくむ秦王府主簿・文学館学士である李玄道（表1-3）がいた。秦王李世民的ブレンとして名高い「秦王府十八学士」の一人である。そして李玄道は「本隴西人也。世居鄭州、為山東冠族（本隴西の人なり。世よ鄭州に居り、山東の冠族と為る）。」とあるように⁽¹⁹⁾、郡望の隴西は山東に属さないが、代々、鄭州を本貫地とし、山東貴族と見なされていた。

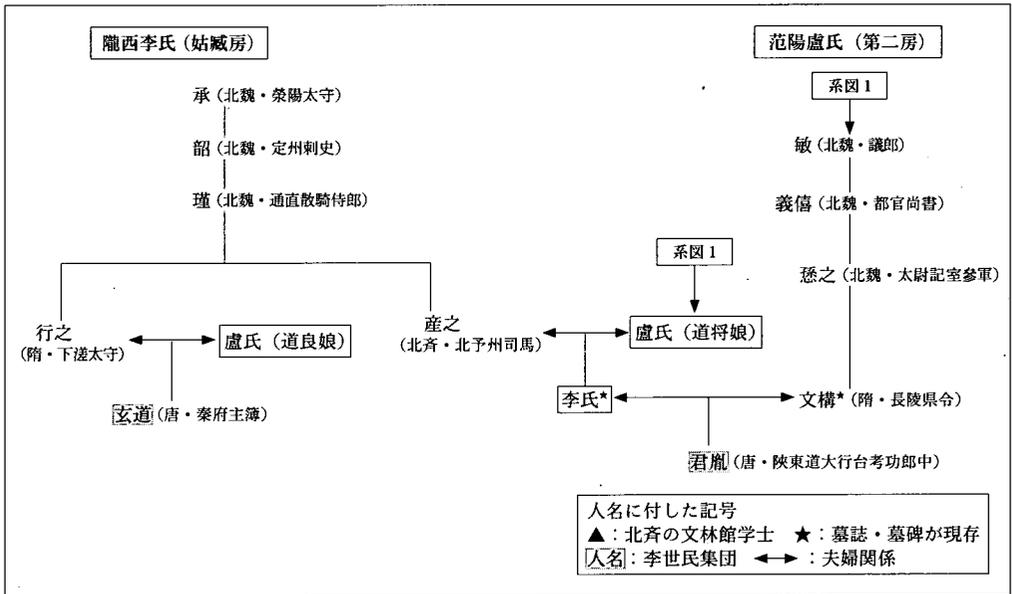
加えて、李玄道の父である李行之は、北斉では齊郡太守兼青州刺史となり、後に隋へ入仕して下澁太守となった人物で、北斉系の家柄である。李行之は盧赤松の祖父盧道良の娘を娶っている⁽²⁰⁾（系図2「范陽盧氏（第二房）・隴西李氏（姑臧房）婚姻関係図」）。李行之の妻は盧赤松からみれば叔母にあたり、李玄道と盧赤松は従兄弟同士となる。なお、房玄齡は李玄道から見れば従甥（従姉妹の子）にあたり⁽²¹⁾、婚姻関係が結ばれていた。

また、李玄道の叔父にあたる李産之は、盧赤松の祖父の兄弟である盧道将の娘を娶っている。

系図1 [清河房氏・渤海封氏・范陽盧氏婚姻関係図]



系図2 [范陽盧氏（第二房）・隴西李氏（姑臧房）婚姻関係図]



その娘である李月相，つまり李玄道の従姉妹にあたる女性は，盧文構に嫁いでいる⁽²²⁾。盧文構は「北祖四房」の第二房の流れを汲む人物である。第二房は盧赤松の曾祖父である盧淵の弟，盧敏より別れた家系で，盧文構と李月相の間に生まれた盧君胤（表1-5）もまた，李玄道と同じく秦王李世民に仕え，陝東道大行台尚書省の膳部郎中と屯田郎中を歴任している（系図2）。

さらに，李世民派の宰相の一人として天策府司馬を兼任した，山東貴族の渤海封氏に連なる

封倫（表1-6）の舅は、盧思道と言ひ、盧赤松の父その人である⁽²³⁾。また、封倫のおいの封泰（表1-7）も、秦王府参軍として李世民集団に参加した（系図1）。

このように、房玄齡（清河房氏）は、李世民集団の北齊系人士である盧赤松（范陽盧氏大房）・盧君胤（范陽盧氏第二房）・封倫・封泰（渤海封氏）・李玄道（隴西李氏姑臧房）らと、婚姻関係を結んでいた。この婚姻グループを仮に「房氏グループ」と呼称しよう。

(2) 李世民集団の形成と薛道衡の人脈

前節では秦王府の北齊系人士間の婚姻関係を確認したが、つぎに彼らの交際関係を見ておこう。李世民集団に属する北齊系人士、あるいはその兄弟・縁者の正史の列伝中では、立伝された人物が、ある人物と友誼を結んだ、あるいは推薦された、あるいはその人物を見込まれて評価された、という記事がしばしば確認できる。

例えば、北齊の宗室の流れを汲む高士廉（表1-2）の列伝（『旧唐書』巻65）には、

〔高〕士廉少有器局，頗涉文史。隋司隸大夫薛道衡・起居舍人崔祖濬並称先達，与士廉結忘年之好。

〔高〕士廉，少くして器局有り，頗る文史に渉る。隋の司隸大夫薛道衡・起居舍人崔祖濬，並びに先達と称し，士廉と忘年の好を結ぶ。

とあり、高士廉は、薛道衡・崔祖濬と忘年の交わりを結んだことがわかる。ここで注目したいのは、薛道衡なる人物で、彼は名門河東薛氏の出身で、北齊・北周に仕え、隋代では内史侍郎・司隸大夫などの要職を務め、代表的な北齊系人士の一人と目される⁽²⁴⁾。さらにその息子の薛収（表1-8）、薛道衡の兄薛温の孫にあたる薛元超（表1-9）は、ともに李世民的ブレーンとして有名な「秦王十八学士」に名を連ね、血縁にあたる薛懷昱（表1-10）もまた天策府功曹参軍となっており、これらの事実は、薛道衡の一族が李世民集団の重要な構成員であったことを示唆する。

高士廉と同じように、薛道衡と縁深い人物に、李世民集団の温大雅（表1-11）が挙げられる。温大雅の弟、温彦博の伝（『旧唐書』巻61）には、

初，其父友薛道衡・李綱常見〔温〕彦博兄弟三人，咸歎異曰「皆卿相之才。」

初め，其の父（温君悠）の友の薛道衡・李綱，常に〔温〕彦博兄弟三人を見て，咸な歎異して曰く「皆卿相の才なり。」と。

とあり、温大雅兄弟は、父温君悠の友人である薛道衡・李綱から「卿相の才」と評されたという。ここからは、温君悠父子が世代を超えて、薛道衡と交際した様子が窺える。このように、薛道衡と世代を超えて交際した李世民集団の北齊系人士の例として、顔師古（表1-13）が挙げられる。『旧唐書』巻73・本伝には、彼が安養県尉になった時の事跡を伝えて、

時薛道衡為襄州総管，与其祖有旧⁽²⁵⁾，又悦其才，有所綴文，嘗使其掎摭利病，甚親昵之。

時に薛道衡、襄州総管と為り、其の祖（顔之推）と旧有り、又其の才を悦び、綴る所の文有れば、嘗に其の利病を掎摭せしめ、甚だ之と親昵す。

とある。顔師古は、入関途上の李淵軍に投じ、李世民的幕府である焮煌公府文学となり、高祖朝では中書舎人となった⁽²⁶⁾。玄武門の変前夜、彼はすでに、李世民的幕僚ではなかったが、『新唐書』巻201・文藝上・袁朗伝の李世民派の人士を列举した記事にその名を留め、李世民集団と見なせる人物である。上記の史料からは、彼の祖父顔之推もまた、薛道衡の旧友であり、彼自身もまた薛道衡と親しく交際したことがわかる。それに加えて、顔師古の父顔思魯（表1-12）は、秦府記室参軍を勤め、弟の顔相時（表1-14）もまた、秦府文学館学士に抜擢されて、「秦王十八学士」に数えられ、ともに李世民集団に参加している。

このように、李世民集団には、薛道衡と関係が深い人物として、薛収・薛元超・薛懷昱・高士廉・温大雅・顔思魯父子が挙げられ、その中でも、温大雅の父温君悠・顔思魯の父顔之推は、薛道衡の友人であった。温君悠は北齊に仕えて文林館学士となり、隋では泗州司馬・司隸從事を歴任した⁽²⁷⁾。顔之推は、『顔氏家訓』の著者として有名で、はじめ南朝の梁に仕えていたが、侯景の乱に巻き込まれ、紆余曲折をへて、北齊・北周・隋に仕えた人物である。北齊では黄門侍郎となり、文林館学士を兼任した⁽²⁸⁾。

温君悠・顔之推らが任命された文林館学士は、薛道衡も就任している⁽²⁹⁾。文林館とは、北齊末期の武平4（573）年に、漢人貴族グループの領袖祖珽の肝煎りで、類書『修文殿御覽』の編纂を目的として設立されたアカデミーである。当時の北齊政界は、勲貴・恩倖・漢人貴族が三つ巴となって抗争しており、漢人貴族の牙城という側面もあった。文林館学士は待詔文林館とも言い、この学館詰めの学士のことである⁽³⁰⁾。すなわち、薛道衡・温君悠・顔之推もまた、そのメンバーであった。

薛道衡・温君悠父子・顔之推父子らの交際からも判明するように、彼ら文林館系の結束の強さは、その子弟の世代にまで及んでいた。そして、文林館系の人脈、とりわけ薛道衡の人脈は、李世民集団の構成要素として、重要な部分を占めていたのである。

しかしながら、李世民集団の北齊系人士グループが、文林館系のみで構成されていたわけではない。前節で述べた房氏グループも、重要な構成要素であった。では、薛道衡と房氏グループに属する李世民集団の北齊系人士（①房玄齡、②盧赤松、③盧君胤、④封倫、⑤封泰、⑥李玄道）とは、如何なる人間関係があったのだろうか。

それについて検討した結果、薛道衡と直接交流した可能性があるのは、①房玄齡、②盧赤松の二名であった。以下、考証の結果を示しておこう。

① 房玄齡（表1-1）

房氏グループの中心人物である房玄齡と、薛道衡が直接交流を持ったとする記事は、見出せ

ない。しかしながら、彼の父の房彦謙は『隋書』巻66・本伝に、

内史侍郎薛道衡，一代文宗，位望清顯，所与交結，皆海内名賢。重〔房〕彦謙為人，深加友敬。

内史侍郎薛道衡，一代の文宗にして，位望は清顯，ともに交結する所は，皆海内の名賢なり。〔房〕彦謙の人と為りを重んじ，深く友敬を加う。

とあるように，薛道衡と親密に交際した。さらに、『北史』巻39・房彦謙伝では，房彦謙と友誼を結んだ人物として王劼・高構・李綱・郎茂・郎穎・柳彧・薛孺ら7名を列举するが⁽³¹⁾，そのうち，薛道衡と縁深い関係があったと目される人物を4名見出すことができた。以下に考証した結果を述べておく。

A 王劼

王劼は藤善眞澄氏の研究によると⁽³²⁾，門閥太原王氏（大房）に連なり，北齊では文林館学士となり，隋に仕えて著作郎となった。王劼は文林館系なので，薛道衡との交流があったとみてよいのではないか。

B 高構（高孝基）

高構は字を孝基と言い，北海郡の出身である。北齊に出仕して平原太守となり，隋の煬帝の時，吏部侍郎まで昇進した。『隋書』巻66・本伝には、

河東薛道衡，才高当世。每称〔高〕構有清鑒，所為文筆，必先以草呈構，而後出之。構有所詆訶，道衡未嘗不嗟伏。…中略…所举杜如晦，房玄齡等，後皆自致公輔，論者称構有知人之鑒。

河東の薛道衡，才は当世に高し。毎に〔高〕構の清鑒有るを称し，為す所の文筆，必ず先に草を以て構に呈し，而る後に之を出だす。構の詆訶する所有れば，道衡未だ嘗て嗟伏せずんばあらず。…中略…挙げる所の杜如晦・房玄齡等，後に皆自ら公輔を致す。論者，構の知人の鑒有るを称す。

とあり，薛道衡と深い交流があっただけでなく，李世民集団の房玄齡・杜如晦を推挙した人物として知られている。

C 李綱

李綱は『旧唐書』巻62・本伝によれば，山東の渤海蓆県に本貫を置くが，父の李制は北周の車騎大將軍で，自身も北周の齊王宇文憲の參軍で起家しており，北齊系ではなく北周系である。前掲した『旧唐書』巻61・温彦博伝にある通り，薛道衡・温君悠の友人で，温氏の兄弟を薛道衡と評価した。また『旧唐書』巻73・顔師古伝によれば，顔師古もまた彼の推薦で安養県尉となったように，文林館系の人物と交流を持った。

D 薛孺

薛孺は，隋に出仕して襄城郡掾となった。薛道衡の血縁で，薛収の継族父にあたる⁽³³⁾。

上記の考証によって、薛道衡と房彦謙の互いの交遊関係に、共通する部分があったことが明らかとなった。また、房彦謙が交遊した人士には、薛道衡と同じ文林館系の王劼がおり、李綱のように文林館系と親しい人物がいた。以上の事実は、房彦謙の人脈が文林館系にまで及んでいたことを示唆する。

また、『旧唐書』巻73・薛收伝には、

薛収字伯褒，蒲州汾陰人，隋内史侍郎〔薛〕道衡子也。…中略…秦府記室房玄齡薦之於太宗。…中略…授秦府主簿，判陝東道大行台金部郎中。

薛収，字は伯褒，蒲州汾陰の人，隋の内史侍郎〔薛〕道衡の子なり。…中略…秦府記室房玄齡，之を太宗に薦む。…中略…秦府主簿を授けられ，陝東道大行台金部郎中を判す。

とあり、房玄齡は、父の友人であった薛道衡の息子の薛收を、李世民に推薦している。そこから、両者の父親同士の交遊関係が、息子たちの代まで影響を与えていることが窺える。房玄齡と薛道衡は直接交流を示す史料が無くても、父房彦謙及びその人脈を通じて、交際を持った可能性が高い。

② 盧赤松（表1-4）

盧赤松は前節で再現した婚姻関係以外に、『旧唐書』巻81・盧承慶伝の微細な記事以外、事跡があまり伝わっていない。それによれば、隋末、河東県令となっていたが、李淵と旧交があったので、太原で挙兵した李淵の軍に参加した。唐創業後、李世民の幕府に陝東道行台兵部郎中として迎えられ、後に太子率更令となり、間もなく死亡したという。彼もまた薛道衡と直接交遊した記事は見えないが、その父盧思道は北齊の文林館学士で、薛道衡の友人であった⁽³⁴⁾。文林館系の薛道衡・顔之推・温君悠らが世代を超えて交際した例からみて、盧赤松もまた直接薛道衡と、交遊関係を持ったことが推定される。

以上、検討した房氏グループの6名のうち、薛道衡と強いつながりがあったと推測されるのは、房玄齡と盧赤松のみであった。しかしながら、房氏グループは婚姻関係で結ばれているので、必然的に、③盧君胤、④封倫、⑤封泰、⑥李玄道らも、薛道衡とは接点をもつこととなる。

ここで注目されるのは、李世民集団の下にあって、人材収集に尽力した房玄齡が房氏グループだけでなく、文林館系とも強いつながりを持っていたことである。それは房彦謙の交遊関係が文林館系にまで及んでいたことや、房玄齡が薛道衡の子である薛収を推薦したことからも確認される。ここから、房玄齡がその人脈を駆使して、北齊系人士を李世民集団に結集させた可能性は十分に考えられる。山下将司氏は、房玄齡の影響力を済水流域の人士のみに限定して論じられているが、本節で述べた婚姻関係・交遊関係を踏まえた場合、それより広範囲の北齊系人士にまで影響力が及んでいたことが判明するのである。

また、上記で述べてきた房玄齡の人脈は、視点を変えれば、薛道衡の人脈とも言える。そこからは、薛道衡が文林館系に留まらず、広範囲な北齊系人士と交際したことが窺える。「表1」からは、北齊系人士24名（薛道衡の一族を含む）のうち、文林館系と房氏グループを包括した薛道衡の人脈に連なる人物が、15名（No.1～15）にのぼり、過半数を超えるのである。それは、彼らが李世民集団に、集団性を維持して参加した証左といえまいか。

2. 隋の政界における薛道衡

(1) 薛道衡の略歴

前章において、李世民集団の北齊系人士の大部分が、薛道衡の人脈に連なり、集団性をもって、李世民集団に参加したことが明らかとなった。また、彼らが集団性を維持し続けたのは、共通の政治的目的があったからではなかろうか。また薛道衡は、なぜ、北齊系人士間に、広範囲な人脈を持っていたのか。ここにおいて、薛道衡なる人物が俄然注目される。政治家の人脈・政治目的は、その立場によって左右される。そこで本章では、薛道衡の伝記を『隋書』巻57・『北史』巻36に見える本伝を中心に、年譜形式で整理した上で（33頁参照）、隋の政界における彼の政治的立場を検討し、如上の問題を明らかにしたい⁽³⁵⁾。

薛道衡は河東汾陰の薛氏の出身で、北魏末に常山太守となり、後に東魏の高歓に厚遇された薛孝通の子である。

北齊において薛道衡は、司州牧・彭城王高湊の兵曹從事に起家し（22才）、武平元年（570）には、五礼の修定事業に参与し尚書左外兵郎となった。この間、薛道衡は、漢人貴族の楊愔・辛述・裴讖之・魏収らから、その文才を賞賛され、名門出身の文人官僚として、地歩を固めていた。後に、主客郎を兼ね陳の使者傅縡を接待し、傅縡の贈詩五十韻に和し、北朝だけでなく南朝までその文名が轟いた。

そのような彼が、漢人貴族を中心とする文人官僚の牙城である文林館に入館するのは、当然の成り行きであった。この時、同じく文林館学士の李德林・顔之推・盧思道・温君悠らと交際し、北齊滅亡後もともに北周・隋政権に仕え生涯の盟友となる。その後の官位昇進も順調で、中書侍郎・太子侍読となった。まもなく、漢人貴族の領袖であった祖斑・崔季舒が相継いで失脚し、文林館グループの勢力は後退したが、薛道衡はこれらの事件に巻き込まれず、武平7（576）年、侍中の斛律孝卿と政治の中枢に立った。

北齊滅亡後、北周の武帝によって、薛道衡は文林館の盟友たちと、関中へ半ば強制的に連行された。北周政権下では、御史二命士（正二命）・司禄命士（正三命）などを歴任しているが、北齊で政治の中枢にいた彼にとって、あまりに低い地位であった。

そもそも、北周政権から見れば、薛道衡らは亡国の遺臣であり、決して優遇される立場ではなかった。とくに北周の勲貴たちは、ことあるごとに「関中の旧意」を持ち出し、北齊系人士

への敵愾心をあらわにした。逆に北齊系人士から見れば、文林館が設立されたことから看取されるように、尚文の気風があった北齊時代と比べ、殺伐とした尚武の気風が溢れ、旧時代的な「周礼主義」を採る北周政権下での生活は、決して居心地の良いものではなかった。唐初まで、政治・山東地方社会に影響を与えたとされる「閩隴と山東の対立」の図式が、徐々に醸成されつつあったのである⁽³⁶⁾。それは薛道衡が北周に仕官しながらも、一時は官を捨て郷里に帰っていることから看取されよう。

このように、北周政権下で冷遇されていた北齊系人士たちにとって、「周隋革命」は現状を打破するまたとない機会であった。藤善眞澄氏は、北齊系人士たちが隋を創業する楊堅（隋・文帝）に積極的に貢献する姿を、李徳林を中心として活写している。以下、氏の研究によって、「周隋革命」時の北齊系人士の動向を略述しよう⁽³⁷⁾。

李徳林は、旧文林館グループの一人で、彼は北周政権下において、例外的に武帝から信任され、北齊の遺臣たちの任用を専任されており、いわば北齊系人士の棟梁格であった。彼はその自覚から、北齊系人士の不遇な地位を改善するため、逸早く楊堅の幕僚となり、隋創業後は、内史令という宰相の地位を得た。

一方、「周隋革命」のおり、薛道衡は益州総管梁睿の軍に従軍して、四川で反乱した反楊堅派の王謙の平定に協力し、梁睿を通じて楊堅に皇帝への即位を献策している。藤善氏によれば、この薛道衡の姿もまた李徳林と同様の文脈で理解されるという。

隋創業後も李徳林は北齊系人士の棟梁として、北齊系人士の基盤を奪わんとする郷官廃止や郷里制施行に反対するなど、彼らの権益擁護に尽力した⁽³⁸⁾。李徳林の党派の中心にいたのは、文林館系が強い結束力を持っていたことから察するに、李徳林と同じ文林館系の者たちであったと思われる。薛道衡は突厥遠征に従軍した功績で内史舎人になっており、この人事に内史省を束ねる内史令李徳林の力が働いたことは想像に難くない。

しかしながら、一元化支配を目指す隋政権は、平陳直後に北齊系人士の権益を擁護する李徳林を排除した。それは、隋政権成立後、なおも北齊系人士が不安定な地位にいたことを象徴する事件であり、薛道衡ら北齊系人士に衝撃を与えた⁽³⁹⁾。

政界で棟梁として仰いだ盟友李徳林の亡き後、薛道衡は、文帝期には吏部侍郎（開皇 9～12（589～592）年）・内史侍郎（開皇 12～仁寿 2（592～602）年）を務め、煬帝期には新設された司隸台の長官である司隸大夫（大業 3～5（607～609）年）に就任し、朝政の中枢に参与した。ただしその間、開皇 12（592）年には蘇威の朋党として一時失脚し、仁寿 2（602）年には襄州総管とされて政治の中枢から外され、そして最期には、煬帝の不興を買って、死を賜わるといふ悲劇がまっていた。つまり彼の政治的地位は不安定であったのである。

ここで着目したいのは、薛道衡の司隸大夫就任である。薛道衡は李徳林が失脚するまでの間、あくまで李徳林派の一員にすぎず、李徳林亡き後の官職も枢要な地位であるが次官級に留まり、

主体的に政治を動かす立場にいなかった。それに対して司隸大夫は、薛道衡が初めて主体的に政治を動かせる中央の長官級の地位である。

司隸大夫としての彼の動向を追えば、彼の政治的地位・目的が浮き彫りとなる。また彼は司隸大夫在任中に処刑されており、その処刑背景を考察すれば、何故、彼の政治的地位が不安定であったか解明されるはずである。それらのことについて、節を改めて検討を加えたい。

(2) 薛道衡と司隸台

薛道衡の司隸大夫任官の事情は、『隋書』巻57・本伝では、こう説明される。

煬帝嗣位、転番州刺史。歳余、上表求致仕。帝謂内史侍郎虞世基曰「道衡将至。当以秘書監待之。」道衡既至、上「高祖文皇帝頌」。…中略…帝覽之不悅、顧謂蘇威曰「道衡致美先朝。此魚藻之義也。」於是拜司隸大夫、將置之罪。

煬帝、位を嗣ぐや、番州刺史に転ず。歳余して、上表して致仕を求む。帝、内史侍郎虞世基に謂いて曰く「道衡、將に至らんとす。当に秘書監を以て之に待すべし。」と。道衡、既に至るや、「高祖文皇帝の頌」を上る。…中略…帝、之を覽て悦ばず、顧みて蘇威に謂いて曰く「道衡、美を先朝に致す。此れ魚藻の義なり。」と。是に於いて司隸大夫を拜し、將に之を罪に置かんとす。

煬帝は薛道衡を番州刺史から中央に召還して秘書監に任命しようとしたが、彼の「高祖文皇帝の頌」を読んで、「魚藻の義」が込められているとし、司隸大夫に任命し、罪に陥れようとした。「魚藻」とは『詩経』小雅・魚藻之什の篇名で、周の衰亡を招いた幽王を風刺し、創業の英主武王を懐古した詩である⁽⁴⁰⁾。煬帝は薛道衡が、隋を創業した父文帝の治世を懐かしんで、暗に自分の政治が、隋の衰亡を招くと批判したと考えた。すなわち『隋書』を素直に読めば、薛道衡の失脚は、大夫就任から仕組まれていた。

しかし、この煬帝の薛道衡登用の動機は、やや不自然である。この時、薛道衡が任命された司隸大夫とは、煬帝によって新設された司隸台の長官である。司隸台は地方観察を司る機関で、その設置には、関中本位政策から脱却し普遍的な体制を確立させる意図があった⁽⁴¹⁾。それだけに、その長官の人事は慎重であったはずである。薛道衡は、司隸大夫に就任する前、襄州総管・番州刺史を歴任している。襄州は襄陽を治所とする長江中流域の要衝であり⁽⁴²⁾、一方の番州は、旧名を広州と言い嶺南の要地である⁽⁴³⁾。薛道衡は襄州では『隋書』巻57・本伝に「在任清簡、吏民懷其惠（任に在りて清簡、吏民は其の恵に懐く）。」とあるような治績を挙げた。要地の長官を歴任し、治績も挙げた薛道衡は、地方監察を総覧する司隸大夫に適任であった。煬帝が薛道衡を司隸大夫に抜擢したのは、失脚を意図したとするよりも、薛道衡の地方官としての治績・経験を地方監察に生かされることを期待してのものと考えた方が合理的である。

これとは別に、『隋書』巻67・裴蘊伝には、裴蘊の薛道衡の罪を論じた上奏を受けて、煬帝

は、「我少時与此人相隨行役，輕我童稚。共高頴・賀若弼等外擅威權（我少き時，此の人（薛道衡）と相い隨いて行役（＝平陳の役）す。我を童稚と輕んじ，高頴・賀若弼等と共に，外に威權を擅にす）。」と述べたとされる。ここで，薛道衡を含めて槍玉に挙げられた高頴・賀若弼は，文帝以来の功臣である。煬帝の言からは，彼らかけむたい老臣であったことが見て取れる。

また，煬帝が薛道衡に死を賜った直接の動機は，「大業令」の完成が遅れたことについて，薛道衡が「向使高頴不死，令決当久行（向に高頴をして死せざらしむれば，令は決し当に久しく行わるべし）。」（『隋書』巻57・本伝）ともらしたことにあった。高頴は煬帝によって誅殺されており，煬帝が老臣・薛道衡の言を，朝政を批判したものと曲解させるのに十分であった。この薛道衡の処刑理由は，本節冒頭で掲げた『隋書』巻57・薛道衡伝で，煬帝が薛道衡を司隸大夫に任命した理由と通ずるものがある。煬帝が薛道衡を排除した動機として，先代以来の老臣への不満があったことも，一概に否定できないが，『隋書』巻57・薛道衡伝にあるように，薛道衡自身も処刑直前まで，自分の処置が軽くすむことを確信していたことや，当時の世人が，薛道衡を冤罪と考えたように，処刑するには，やや強引な理由付けであった。

そうであるとすれば，薛道衡の失脚の理由は別に求められてよい。では，司隸大夫としての薛道衡は如何なる動きを示したのであろうか。

司隸台の職掌は地方行政の監察である。その監察業務を行うのは司隸刺史とその副官たる司隸從事たちで，毎年2～10月に監察を行い，10月に入朝して皇帝に復命することとなっていた。その業務を総覧するのが，長官の司隸大夫である⁽⁴⁴⁾。この司隸大夫に就いた薛道衡について，『隋書』巻73・循吏・敬肅伝に，このような話がある。

敬肅字弘儉，河東蒲坂人也。…中略…煬帝嗣位，遷潁川郡丞。大業五年，朝東都，帝令司隸大夫薛道衡為天下郡官之狀。道衡狀稱肅曰「心如鉄石，老而弥篤。」

敬肅，字は弘儉，河東蒲坂の人なり。…中略…煬帝，位を嗣ぐや，潁川郡丞に遷る。大業五（609）年，東都に朝し，帝，司隸大夫薛道衡をして天下郡官の狀を為さしむ。道衡，狀もて肅を称して曰く「心は鉄石の如し，老いて弥いよ篤し。」と。

上記によれば，司隸大夫として薛道衡は「天下郡官の狀」（＝地方官の勤務評定）を作成したという。このように，地方官の最終的な評価は，薛道衡に委ねられており，地方行政に大きな発言力を持っていた。上記の記事と関連して，『隋書』巻73・柳儉伝に，

〔柳儉〕拜弘化太守。…中略…大業五年入朝，郡国畢集。帝謂納言蘇威・吏部尚書牛弘曰「其中清名天下第一為誰。」威等以儉對。帝又問其次。威以涿郡丞郭紇・潁川郡丞敬肅等二人對。

〔柳儉〕弘化太守を拜す。…中略…大業五（609）年入朝し，郡国畢集す。帝，納言蘇威・吏部尚書牛弘に謂いて曰く「其の中の清名天下第一は誰と為すか。」と。威等，儉を以て對う。帝，又其の次を問う。威，涿郡丞郭紇・潁川郡丞敬肅等二人を以て對う。

とある。この記事は、前掲「敬肅伝」の記事を異なる角度から伝えたもので、二つの史料を踏まえれば、「天下郡官の状」で成績優秀とされた者は、柳俛・敬肅・郭絢の三名であったことが明らかとなる。この三名は、いずれも薛道衡と同じ河東郡出身であり⁽⁴⁵⁾、薛道衡は司隸大夫の権限を利用して、同郷の人士を引き上げたのである。

もしこの推測が正しいとすれば、薛道衡のこの意図は、司隸台の属官の人事にも及んだはずである。たとえば、『隋書』巻58・李文博伝に、

博陵李文博，…中略…開皇中，為羽騎尉，特為吏部侍郎薛道衡所知。…中略…道衡為司隸大夫，遇之於東都尚書省，甚嗟愍之，遂奏為從事。

博陵の李文博，…中略…開皇中，羽騎尉と為り，特に吏部侍郎薛道衡の知る所と為る。…中略…道衡，司隸大夫と為るや，之に東都の尚書省に遇い，甚だ之を嗟愍し，遂に奏して從事と為す⁽⁴⁶⁾。

とあるように、薛道衡は以前よりその才を見込んでいた李文博を、上奏して司隸従事に任命していることが見える。関連して、薛道衡が任官していた当時、如何なる人物が司隸台の属官に就任していたのかを諸史料より拾い出してみた（表2）。

表2 薛道衡在任期間（大業3～5（607～609）年⁽⁴⁷⁾）における司隸台の人的構成

No.	任官者	官職	本貫地	祖 父		父		典拠及備考
				名	官 職	名	官 職	
①	劉焯	別駕	?	?	?	?	隋 66	
②	房彦謙	刺史	齊州臨淄	翼	北魏・宋安太守	熊	北魏・広川太守	隋 66 ※北齊に仕え齊州主簿となる。
③	温君悠	司隸従事	并州祁	?	?	裕	北魏・太中大夫	旧 61・新 91・温彦博碑・墓誌 ※北齊の文林館学士
④	李徳饒		趙郡柏人	徹	北齊・尚書右丞	純	隋・介州刺史	隋 72・北 33・世 72 上
⑤	杜正蔵		相州洹水	景	処士	裕	北齊・樂陵令	隋 76・北 26
⑥	李文博		博陵	?	?	?	?	隋 58

〔凡例〕 典拠の史料略記号は、隋＝『隋書』・北＝『北史』・旧＝『旧唐書』・新＝『新唐書』・世＝『新唐書』宰相世系表。数字は巻数。

表2を一覧して解るように、系譜伝記不明の①劉焯と系譜不明の⑥李文博を除いて、②～⑤は北齊系で、司隸台の属官に北齊系が多用されていたことが判明する。以下、伝記不明の①劉焯を除いて、司隸台の属官に就任した人物の略歴について、検討を加えよう。

② 房彦謙 司隸刺史

房彦謙は房玄齡の父で、薛道衡の友人である。『隋書』巻66・本伝によれば、司隸台が創設

され、朝廷が「天下知名の士」からその属官を登用した時に、司隸刺史となった。先に挙げた李文博の例を念頭に置くと、房彦謙の任官には薛道衡の意思が働いた可能性が高いだろう。

③ 温君悠 司隸従事

前述した通り温君悠は、温大雅の父で、文林館以来の薛道衡の友人である。『旧唐書』巻61・温大雅伝によれば、

父君悠、北齐文林館学士、隋泗州司馬。大業末、為司隸従事、見隋政日乱、謝病而帰。

〔温大雅の〕父の君悠、北齐の文林館学士、隋の泗州司馬なり。大業の末、司隸従事と為り、隋政日ごと乱るるを見て、病と謝して帰る。

とあり、温君悠が司隸従事となったのは、隋の煬帝の大業末年とされる。しかしながら、温大雅伝はその後、温大雅の隋代での事跡を、

〔温大雅〕仕隋東宮学士・長安県尉、以父憂去職。後以天下方乱、不求仕進。

〔温大雅〕隋に仕え東宮学士・長安県尉たり。父の憂を以て職を去る。後に天下、方に乱るるを以て、仕進を求めず。

と述べ、温君悠の死と隋末の大乱との間には、ややタイムラグがあると思われる。加えて温大雅が仕官を拒否したというのであれば、少なくとも大業末年=14(618)年より以前のこととなる。服喪の期間を入れるのであれば、さらに温君悠の司隸従事就任は、時期が遡るであろう。『旧唐書』の温君悠が従事に任官したとされる「大業末」という表現は、疑問が残るのである。そのことを踏まえて、温君悠の子である温彦博の墓碑を見ると「大業之始、以親喪去官（大業の始め、親の喪を以て官を去る）。」とある⁽⁴⁸⁾。「大業之始」という表現は、大業年間は14年までであり、その前期となれば、大業元~5(605~609)年頃と考えるのが一般的であろうから、温君悠の従事任官は、薛道衡の司隸大夫在任期間と一致する。温君悠の任官の背景にも薛道衡の意向が働いた可能性が高い。

④ 李徳饒 司隸従事

李徳饒は、山東貴族「趙郡李氏」の出身である。祖の李徹は北齐の尚書右丞で、父の李純は隋の介州刺史であった。『隋書』巻72・本伝によれば、李徳饒は、大業3(607)年に司隸従事となっている。

⑤ 杜正蔵 司隸従事

杜正蔵の祖父杜景は処士で、父杜裕は北齐の楽陵令であった。『旧唐書』巻73に弟の杜正倫の伝があり、相州洹水の人とある。薛道衡の推薦で司隸従事となった。なお弟の杜正倫(表1-15)は李世民集団の一人である。

⑥ 李文博 司隸従事

李文博は、父祖の履歴は不明であるが、山東の博陵出身で、北齐系と見なしてよい。『隋書』巻58・本伝によれば、房玄齡とも面識があった。前述したとおり、薛道衡の推薦で司隸従事

に任官した。

以上、検討を加えた5名のうち、⑤杜正蔵、⑥李文博は確実に薛道衡の推薦で任官しており、そうでなくても②房彦謙、③温君悠は薛道衡の友人であって、やはりその任官には薛道衡の力が働いたと推察できる。ただ④李徳饒については、薛道衡との交流関係は見出せない。また彼等のうち、司隸台の官職につく前の官は、②房彦謙、③温君悠は州司馬に過ぎず⁽⁴⁹⁾、⑤杜正蔵も科挙の結果が乙第であったことが不満で官に訴え出たため、丙第に落とされ、県正の地位に甘んじていた⁽⁵⁰⁾。⑥李文博は県丞となったものも、勤務評定での評価が悪く、数年も任用されなかった。いずれも北齊系であったため、不遇を託っていたと思われる。以上の司隸台属官の人的構成を踏まえると、自己に近い北齊系人士を登用して、司隸台を固めんとする薛道衡の姿が浮かびあがってくるのである。

このような薛道衡の姿から、彼が李徳林亡き後の、北齊系人士の中心的存在であったことが判明する。だからこそ北齊系人士と広く交際が認められるのである。このことを踏まえれば、前述した薛道衡の人脈は、薛道衡を領袖に戴く、「薛道衡グループ」と称してもよい北齊系人士を中心に構成された政治党派であったことが、明らかとなる。

薛道衡は司隸大夫に任官する前、『隋書』巻57・本伝に、「煬帝嗣位、転番州刺史。歳余、上表求致仕（煬帝位を嗣ぐや、番州刺史に転ず。歳余して、上表して致仕を求む）。」とあるように、引退の意思を示していたという。それにも関わらず任官を受けた。この矛盾した行動の背景には、煬帝の要請もさることながら、再び中枢の地位に就くことで、文帝期に低く置かれてきた北齊系人士の立場を改善しようとする使命感があったのではないだろうか⁽⁵¹⁾。この彼の政治方針は、隋の前期の北齊系人士の代表格李徳林と通じるものがある。また、薛道衡が司隸台に北齊系を結集させたことは、全土に基盤を置こうとする煬帝の一定の了解があって可能となる。煬帝が薛道衡を登用した理由は、薛道衡の地方行政の見識を見込んだだけでなく、北齊系人士の代表格としての影響力をも期待してのものであった。

以上を踏まえるならば、薛道衡が処刑された理由に別の解釈をすることが可能となる。薛道衡は司隸大夫として北齊系人士を擁護した。このことは、関中本位政策から脱却し一元的支配体制を構築しようとする煬帝から了解を得て、すすめられたはずであったものの、余りにゆきすぎてしまった結果、悲劇的な末路をたどったのである。とりもなおさず、それは、李徳林の失脚と同様、北齊系人士の政治的地位の不安定さを象徴するものであった。

こうして、薛道衡の失脚を以て、李徳林・薛道衡と領袖を替えて、推進されてきた北齊系人士の地位向上を目指した動きは頓挫した。北齊系人士の政治的地位は不遇のまま、隋末の動乱を迎えることとなった。薛道衡グループの者たちは、例えば、温大雅は李淵の太原挙兵に積極的に参加して大將軍府記室参軍となり⁽⁵²⁾、顔師古もまた長安進撃中の李淵の軍に投じ⁽⁵³⁾、薛道

衡の子の薛収にいたっては、敵陣にあって、母を人質にとられながらも、単身逃亡し唐政權に投じている⁽⁶⁴⁾。このように、彼らは唐朝の創業に逸早く呼応した。その背後には、新王朝創業に積極的に貢献することによって、北齊系人士の地位を向上させようという意思が働いたにちがいない。

そして、房玄齡ら薛道衡グループの系譜を引く人々は、李世民と邂逅を果たす。彼らが集団性を以て、李世民集団に加わったのは前述の通りである。その集団性が維持されたのは、李徳林・薛道衡以来の不遇な北齊系人士の地位を向上させようとする目的があったからである。とすれば、それは山東地域に基盤を築き、北齊系人士の力を結集して、政權を奪取しようとする李世民的利害とも一致するのである。

結 語

本稿では唐の太宗政權の分析を行う前提として、李世民を帝位に押し上げた背後勢力について、先行研究で重視されてきた北齊系人士に焦点を当て検討をこころみた。

まず、李世民集団の北齊系人士の婚姻関係を整理すると、房玄齡・盧赤松・盧君胤・李玄道・封倫・封泰らが、婚姻関係で結ばれていた。そして、交遊関係について検討すると、旧北齊の文林館系・房氏グループをも包括した、隋の名臣にして北齊系人士の薛道衡のグループの出身者が、集団性を以て李世民集団に参加していた。

その薛道衡グループと李世民を結合させたのは、薛道衡グループとパイプを持ち、李世民集団の人材収集に尽力した房玄齡であった。これを踏まえれば、彼の影響力は済水流域の人士にとどまらず、より広範囲な北齊系人士にまで及んでいたことが判明する。

次に、薛道衡グループの出身者が集団性を以て李世民集団に参加した背景には、共通の政治目的が存在したと想定した。彼らの政治的目的を解明するため、薛道衡の隋の政界で如何なる立場にあったかを、司隸大夫に就任した時期に焦点をあて考察した。薛道衡の司隸大夫就任は、煬帝の「関中本位政策」から脱しようとする方針に関わる処置であった。しかし、薛道衡はその機会を利用して、属官を自己の党派である北齊系人士で固め、度を越えて北齊系人士を擁護したため、刑死に追い込まれたのであった。このような薛道衡の姿から、李徳林に代わって、隋代中後期に北齊系人士の代表的立場になったこと、その政治目的が北齊系人士の擁護にあったこと、それは彼の死によって失敗に帰したこと、などの点が明らかとなった。

隋末の動乱に直面すると、薛道衡グループの系譜を引く者たちは、唐の創業に積極的に貢献し、李徳林・薛道衡以来の宿願である北齊系人士の地位改善を図ろうとした。その目的は、山東に地盤を築き、政權の奪取を謀る李世民的利害とも合致し、両者の結合はそのようにして実現したのである。

山下将司氏は、玄武門の変において、李淵集団＝関隴、李世民集団＝山東の対立という図式

を適用することに躊躇する。たしかに、李淵集團・李世民集團ともに、北周系・北齊系・南朝系など、多種多様な人士を包括しており⁽⁵⁵⁾、一見その図式が成立しないように思える。しかし、李世民集團の北齊系人士たちが、閔隴系の北周・隋政権によって貶められてきた自らの地位向上を目的として、李世民を推戴しようとしたところを見ると、やはりこの事件の一因として、「閔隴と山東の対立」があったのである。

また、山下氏は李世民が山東集團、李淵が太原元従と、それぞれ異なる基盤を持つことから、玄武門の変を政権構造が変化する契機とした。しかし、李世民集團における、北周系人士の存在を忘れてはならず、唐室李氏もまた本来は北周系であり、必ずしも北齊系だけを基盤としたわけではないので、唐政権の構造が李世民即位を契機に変化したとするのは、留保しておく⁽⁵⁶⁾。筆者の今後の課題は、李世民集團の北周系人士の分析し、本稿の考察を踏まえた上で、太宗政権の性格を解明することである。

注

- (1) 布目潮風『隋唐史研究』（京都大学東洋史研究会、1968年）、下編「唐朝政権の構成」・第1章「唐朝創業期における三省六部の人的構成」（原題「唐朝創業期の一考察」、『東洋史研究』25-1、1966年初出）、第2章「秦王世民—即位前の唐太宗」（原題「天策上將・陝東道大行台尚書令・秦王世民—即位前の唐太宗」、『立命館文学』255、1967年初出）、第3章「玄武門の変」（『大阪大学教養部研究集録』（人文社会科学）16、1968年初出）を参照。

また閔隴集團説については、陳寅恪『唐代政治史述論稿』（商務印書館、1944年）を参照。陳氏によれば、閔隴集團とは西魏・北周の中核である八柱国十二大將軍のメンバーに代表される、六鎮の乱で閔隴に土着した北族勢力が、同地の漢族豪族と融合して生まれた官僚集團のことである。

- (2) 「山東」とは、華山以東の地あるいは、太行山脈以東の地を漠然と指す慣習語であるが、北朝後期～唐初の頃は旧北齊地域を指すのにしばしば使用された語である。『隋書』巻24・食貨志に、
開皇三年正月、…中略…是時山東尚承齊俗、機巧姦偽、避役惰遊者十六七。四方疲人、或詐老詐小、規免租賦。高祖令州縣大索貌閱。
開皇三(583)年正月、…中略…是の時、山東尚お〔北〕齊の俗を承け、機巧姦偽もて、役を避け惰遊する者十に六七なり。四方の疲人、或いは老を詐り小を詐り、租賦を免れんことを規る。高祖、州縣をして大索貌閱せしむ。

とあり、旧北齊領を指して、山東の語を用いている例がある。よって、本稿において「山東」とは旧北齊領域を指すものとする。

- (3) 陳寅恪「論隋末唐初所謂「山東豪傑」」（『嶺南學報』12-1、1952年。後に同氏著『金明館叢稿初編』上海古籍出版社、1980年に再録）。
- (4) 陳寅恪「記唐代之李武韋楊婚姻集團」（『歷史研究』1954年1期初出、同氏著『金明館叢稿初編』上海古籍出版社、1980年に再録）。
- (5) 氣賀澤保規「隋代郷里制に関する一考察」（『史林』58-4、1975年）を参照。この理解は概ね、我が国の学界では受け入れられており、藤善眞澄氏もまた、北周・隋政権内の北齊系人士の動向を追い、北齊系人士と北周系人士の対立を浮き彫りにした（「北齊系官僚の一動向」（『鷹陵史学』4、1977年。同氏著『道宣伝の研究』、京都大学学術出版会、2002年に再録）。また近年、大陸においても牟亮松氏が閔隴集團説を踏まえた上で、閔隴集團と北齊系人士の対立を論証されている（「旧齊士人与周隋政権」（『文史』2003-1、2003年））。

- (6) 氣賀澤保規「竇建德集團と河北—隋唐帝国の性格をめぐる—」(『東洋史研究』31-4, 1973年)。
- (7) 本稿において北齊系人士とは、本人もしくは祖父・父等直系の血縁者が東魏・北齊に仕えた人士を指す。
- (8) 李錦綉「論「李氏將興」—隋末唐初山東豪傑研究之一」(『山西師大學報』24-4, 1997年)。
- (9) 山下將司「玄武門の変と李世民配下の山東集團—房玄齡と齊濟地方—」(『東洋學報』85-2, 2003年)。
- (10) 唐の行政区画で言えば、齊州・濟州一帶、山下氏はこれを「齊濟地方」と呼称している。
- (11) 具体的には、山下氏が分析した山東人士19名のうち、尉遲敬德・程知節・秦叔宝・段志玄・張公謹・常何の6名が、陳寅恪・李錦綉両氏が山東豪傑とした人物である。
- (12) 布目潮瀨氏, 注(1)前掲書, 下編・第二章「秦王世民」を参照。
- (13) 陝東道大行台尚書省の沿革については、杉井一臣「唐初の行台尚書省」(『中國史研究』(大阪市立大學)7号, 1982年)を参照。
- (14) 布目潮瀨氏, 注(1)前掲書, 下編・第二章「秦王世民」を参照。
- (15) 「房彦詡墓誌」は、1977年(一説に76年)に山東省濟南市歷城区姚家鎮牛王庄より、息子の「房夷吾墓誌」とともに発見された。現在、山東省考古文物研究所蔵である。「房彦詡墓誌」を含め、新出の房玄齡一族の墓誌を紹介したものに、蘇玉瓊「房氏墓誌考略」(『中原文物』1995-2, 1995年), 張幼輝・孟梅「房彦詡墓誌考」(『中國歷史文物』2003-3, 2003年), 賴非「齊魯碑刻墓誌研究」『漢唐墓誌』第四章「山東望族墓地及墓誌考釈」(齊魯書社, 2004年)がある。
- (16) 北朝の盧氏については、陳爽『世家大族与北朝政治』(東方歷史學術文庫・1997年度, 中國社會科學出版社), 第二章第六節「從北魏“四姓”到唐代的“七姓十家”」を参照。また唐代の盧氏については、愛宕元「唐代范陽盧氏研究—婚姻關係を中心に—」(川勝義雄・磯波護編『中國貴族制社會の研究』, 京都大學人文科學研究所, 1987年)を参照。
- (17) 「系圖1」及び「系圖2」を作成するにあたり、次の文献を参照した。以下、姓ごとに文献を掲げる。清河房氏については、『北史』卷39・房法壽傳, 『隋書』卷66・房彦謙傳, 「房彦謙碑」(『金石萃編』卷43, 『全唐文』卷143等に収録), 「房彦詡墓誌」などの房氏関連の墓誌(注(15)前掲論文), 山下將司氏注(9)前掲論文を参照した。范陽盧氏は、史料として、『北史』卷30・盧玄伝, 『旧唐書』卷81・盧承慶傳, 『新唐書』卷73上・宰相世系表「范陽盧氏」, 「盧文構墓誌」(北京圖書館金石組編『北京圖書館藏中國歷代石刻彙編』9, 1989~1991年に収録), 「盧文構妻李月相墓誌」(北京圖書館金石組編『北京圖書館藏中國歷代石刻彙編』11, 1989~1991年に収録)を参照し、先行研究として愛宕元氏・陳爽氏の注(16)前掲論文を参照した。渤海封氏については、史料として、『北史』卷24・封懿傳, 『北齊書』卷21・封隆之傳, 「封公妻王楚英墓誌」, 「封楚英妻崔長暉墓誌」, 「封公妻崔婁訶墓誌」(以上、河北省文物研究所墓誌編輯組編『隋唐五代墓誌彙編』河北卷(天津古籍出版社, 1991年)に収録), 「封泰墓誌」(洛陽古代藝術館編『隋唐五代墓誌彙編』洛陽卷5(天津古籍出版社, 1991年))を参照した。隴西李氏は、『北史』卷100・序伝, 『旧唐書』卷72・李玄道傳, 『新唐書』卷72宰相世系表「隴西李氏姑臧房」を参照して作成した。
- また、二つの系図は、李世民集團の北齊系人士の婚姻關係を再現するのに重点を置いたので、紙幅の關係上、婚姻關係を提示するのに必要のない人物は省略に従ったことを断っておく。
- (18) 陳爽氏, 愛宕元氏の注(16)前掲論文を参照。
- (19) 『旧唐書』卷72・李玄道傳を参照。
- (20) 『北史』卷100・序伝を参照。
- (21) 『旧唐書』卷72・李玄道傳を参照。
- (22) 愛宕元氏, 注(16)前掲論文を参照。
- (23) 『旧唐書』卷63・封倫伝。
- (24) 『隋書』卷57・薛道衡伝。
- (25) 中華書局標点本の『旧唐書』卷73の原文は「其祖」を「高祖」に作るが、同書校勘記によれば

即位前の唐太宗・秦王李世民集団の北齊系人士の分析

- 『新旧唐書合鈔』巻124では「其祖」と作るとある。本文では示した通り、「其祖」とは薛道衡の旧友顔之推を指すと思われる。顔之推は顔師古の祖父であるので、「高祖」より「其祖」の方が文意に相応しいので、『合鈔』に従った。
- (26) 『旧唐書』巻73・顔師古伝を参照。また李世民が煬帝になったことは、『旧唐書』巻1・高祖紀・大業13(617)年6月癸巳の条を参照。
- (27) 『旧唐書』巻61・温大雅伝を参照。
- (28) 顔之推の伝記については、吉川忠夫「顔之推小論」(『東洋史研究』20-4, 1962年初出、後に同氏『六朝精神史研究』(同朋舎出版, 1984年)に「顔之推論」と改題し再録)、宇都宮清吉『中国古代中世史研究』(創文社, 1977年)第12章「顔之推研究」などを参照。
- (29) 『隋書』巻57・薛道衡伝を参照。
- (30) 文林館については、費海濤「北齊文林館」(『大陸雜誌』28-12, 1964年)、尾崎康「北齊の文林館と修文殿御覽」(『史学』(三田史学会)40巻2・3合併号, 1967年)、山崎宏「北周の麟趾殿と北齊の文林館」(『中国仏教・文化史の研究』法蔵館, 1981年)を参照。また北齊政治史の概略は谷川道雄「北齊政治史と漢人貴族」(『名古屋大学文学部研究論集』26, 1962年、同氏著『隋唐帝國形成史論』筑摩書房, 1971年)を参照した。
- (31) 『隋書』巻66・房彦謙伝にもこれに対応する記事はあるが、郎茂・郎穎の名は見えない。
- (32) 藤善眞澄氏注(5)前掲論文参照。
- (33) 『隋書』巻57・薛道衡伝を参照。
- (34) 『隋書』巻57・薛道衡伝を参照。
- (35) 薛道衡の伝記的研究として、鈴木義雄「隋朝官僚としての薛道衡について」(『国学院雑誌』24号, 1973年)があるが、概略的で隋代政治史の中で薛道衡が、どのように位置づけられるのか、説明が十分でない。
- (36) 藤善眞澄氏, 牟登松氏の注(5)前掲論文参照。
- (37) 藤善眞澄氏, 注(5)前掲論文参照。
- (38) 氣賀澤保規氏, 注(5)前掲論文参照。
- (39) 氣賀澤保規氏, 注(5)前掲論文参照。
- (40) 『詩経』小雅・魚藻之什・魚藻の序に「魚藻, 刺幽王也。言万物失其性, 王居鎬京, 将不能以自樂。故君子思古之武王焉(魚藻, 幽王を刺するなり。言に, 万物其の性を失い, 王, 鎬京に居り, 将に以て自ら楽しむ能わず。故に君子, 古の武王を思う。)」とある。
- (41) 司隸台に関しては、杉井一臣「隋, 煬帝の司隸台創設について」(『中国史研究』(大阪市立大学)8号, 1984年)を参照。内田昌功「隋煬帝期官制改革の基礎的研究」(『史朋』33号, 2000年)では司隸台について、その機構・制度には漢制が意識されていると述べている。また以上の先行研究に基づいて、司隸台の官制を表で整理すると以下の通りとなる。

官職名	品階	定員	職 掌
大夫	正四品	1	長官。諸巡察の統括。
別駕	従五品	2	畿内の監察。一人は東都(洛陽)を担当し、もう一人は長安を担当する。
刺史	正六品	14	畿外の各地方の巡察。
司隸從事 (諸郡從事)	?	40	刺史の巡察の補佐。

- (42) 『隋書』巻31・地理志下・襄陽郡を参照。
- (43) 『隋書』巻31・地理志・南海郡を参照。
- (44) 杉井一臣氏, 注(41)前掲論文を参照。
- (45) 柳俛・敬肅・郭綯の三名は『隋書』巻73・循吏伝に立伝されている。

- (46) 『隋書』卷 58・李文博伝。
- (47) 薛道衡の司隸大夫就任期間については、本文の「薛道衡年譜」を参照。
- (48) 「温彦博墓碑」については、張沛編『昭陵碑石』（三秦出版社、1993年）を参照。
- (49) 『旧唐書』卷 61・温大雅伝及び『隋書』卷 66・房彦謙伝を参照。
- (50) 『北史』卷 26・杜銓伝を参照。
- (51) 鈴木義雄氏は注(35)前掲論文で、薛道衡は李徳林失脚後、政治の世界よりも詩文の世界に耽るようになったと評している。しかしそれは一面的理解ではないだろうか。
- (52) 『旧唐書』卷 61・温大雅伝を参照。
- (53) 『旧唐書』卷 73・顔師古伝を参照。
- (54) 『旧唐書』卷 73・薛収伝を参照。
- (55) 李淵集団の人的構成については、布目氏注(1)前掲書、上篇「唐朝政権の源流として見た隋末の反乱」第三章「李淵の起義」（原題「李淵集団の構造」、『立命館文学』243、1965年初出）を参照。また李世民集団の北周系の存在については、布目氏注(1)前掲書、下編・第二章「秦王世民」において確認できる。
- (56) 唐高祖～太宗時代の三省六部長官の人的構成を統計学的手法で分析した吉岡真氏のデータによれば、北斉系が三省六部長官を占める割合は、唐の高祖朝は 22%、太宗朝は 28%で、北周系は高祖朝 59%、太宗朝 54%である（同氏「北朝・隋唐支配層の推移」（『岩波講座世界歴史 9 中華の分裂と再生』、岩波書店、1999年）。二つを比較すると、北斉系人士は、李世民の即位に彼らが貢献したわりに、数値に大きな変化はない。ここからは、李世民は即位後、単に山東のみ基盤としたのではなく、北周系も用いたことが窺える。また両政権の基盤に大きな変化が窺われず、太宗朝の路線が単純に、高祖朝の路線を否定したわけではないという解釈も可能である。

付記

脱稿後、趙君平編『邙洛碑誌三百種』（中華書局、2004年）を見る機会があり、第2章で触れた李世民集団の北斉系人士であり、房玄齡と婚姻関係を結んでいた盧赤松の墓誌が、出土していることを知った。墓誌は、2001年3月に河南省洛陽市孟津県で出土し、ほぼ方形で74×73.5 cmであった。誌文は、山東門閥の嫡流のわりに18行×18字という簡略なものである。墓誌によれば、唐の武徳年間に、李世民の政敵である皇太子李建成の子、太子舎人・太子率更令を歴任しており、文献史料にある李世民集団の官職を帯びていない。これは一体どういうことであろうか。本稿の論旨に深く関わることであり、「盧赤松墓誌」の検討は別の機会に譲りたい。

Analysis of Northern Qi Ex-Officers of the Li Shimin Group before the Enthronement of Emperor Taizong of Tang

HORII Hiroyuki

It was during the reign of Emperor Taizong of Tang (626–649) that the Tang regime became solid and stable. Taizong or Li Shimin took the power as an outcome of the Xuanwumen Incident on June 4, 626, a political process that was not ordinary. A group of people who enthroned Li formed the core of the Taizong administration.

Previous researches into this issue have focused on ex-officers of the Northern Qi Dynasty who were based in the Shandong Province. Background to the Xuanwumen Incident is considered to be a conflict between the Guanlong area and Shandong; the Northern Zhou and Sui administrations were based in the Guanlong area, and subordinated the ex-officers of the Northern Qi Dynasty. However, these previous researches did not clarify relationships among different groups of people and actual political purpose that drove the incident. They only emphasized that Li took advantage of Shandong.

With these in mind, the author looks into relationship among various groups of people. It has become clear that most of the ex-officers of the Northern Qi Dynasty were collectively involved in the Li Shimin group. This collectiveness or being a party was originated from the Xue Daoheng Party who was a representative of the Northern Qi ex-officers under the Sui administration. The political motivation behind the Xue Daoheng Party was to improve the social status of the Northern Qi ex-officers. With the fall of Xue Daoheng, however, their hope was diminished, and the social status of the Northern Qi ex-officers remained low until the end of the Sui Dynasty. Accordingly, the political purpose to improve the status of the Northern Qi ex-officers was handed down to those who belonged to the Li Shimin group. These ex-officers attempted to achieve their goal by supporting and enthroning Li.

Keywords: Tang Dynasty; Li Shimin group; Xuanwumen Incident; Northern Qi ex-officers; Guanlong-Shandong conflict; Xue Daoheng